

全久院報

平成17年6月20日

全久院住職 倉科利行

平成17年もすでに半年が過ぎようとしています。半年間の全久院の動きをお知らせします。

新年総会 従来全久院新年会は1月20日、午後

4時からと決め開催してきましたが、諸般の事情と、少しでも多くの皆様に参加いただきたいと考え、今年から20日に近い土曜日に開催することとなりました。

本年は1月22日土曜日、4時より開催いたしました。宗務所や教区での研修会などの報告、護持会会計の報告などを行いました。

また本年の全久院の事業は、消防署より指摘のあった火災報知器と消火設備の設置を完了する、本堂の屋根ふき替えの準備に入る、などを予定しています。資金に関しては、寄付をお願いせずに、宗教法人と護持会の両方から支出してゆきたいと考えています。



昨年葺き替えられた開山堂の屋根

大本山総持寺直末会 全久院は横浜市鶴見にある、大本山総持寺の直末です。直



青の衣の禪師から離れ前列の左端の住職

末というのは、本山直系の寺ということで、全久院は明治2年に廃仏毀釈にあい廃寺となり旧開智小学校となりましたが、廃仏毀釈が全国的な動きにならないことを確認し、安達達惇和尚(全久院復興2世)の尽力で、大本山総持寺の禪師様の名で復興されました。そこで全久院は本山直系の寺となったのです。直末は全国に168ヶ寺、長野県には10ヶ寺あり

ます。松本市近郊では他に梓川の金松寺、一日市場の真光寺の3ヶ寺があります。

直末会は本年1月12日総持寺様で開催されました。本尊様にお参りし、禪師様にご挨拶します。本山直系の寺ということで一年間の本山の予定や方針が発表され、本山護持の為の結束を図ります。

(一口メモ) 総持寺は曹洞宗を開いた道元禪師から4世目にあたる永平寺の禪師様「蚩山禪師」により開かれました。曹洞宗の大本山は永平寺と総持寺があります。永平寺を開かれた道元禪師と総持寺を開かれた蚩山禪師はぜひ覚えてください。蚩山禪師は1268年誕生され、58才でお亡くなりになりました。厳しい修行を経て多くの弟子を育てました。曹洞宗を世に広める役を果たされました。また尼僧さんも多く育てられ、布教

にも尽力されました。滅後 585 年を経て明治天皇より「常済大師」という大師号を頂くなど、人を救い、曹洞宗を広めた功績は大きく、曹洞宗では道元禅師とともに両祖大師と呼ばれています。

お花祭り

松本仏教和合会(旧市内40ヶ寺)の主催でお釈迦様の誕生をお祝いするお



高木常寿さん宅での昼食

祭りが、本年も5月21、22日に開催されました。本年は百周年を迎えました。この会は日露戦争の戦没者の慰霊法要を松本市を挙げて行った際、すべての宗派のお寺をひとつの会に組織する目的で始まりました。今年の百周年を記念して、托鉢では百周年の文字の入った提灯を配りました。また、城山にて約20分間スターメインなどの花火を打ち上げました。祭りの会場は新装なった松本芸術館をメイン会場に、各種の催しが開催されました。お花祭りの行進はMウイングを出発し、仏教系の幼

稚園児、お稚児さん、清水小学校マーチングバンド、ガール・ボーイスカウト総勢300人ほどが芸術館に向かいました。

これだけのお祭りができたのも、托鉢をお受けいただいた檀家様のおかげです。托鉢は月から金曜日の午前中、4月の一月間、和合会の僧侶が20人ほどで回ります。お宅に上がり、お仏壇の前でお経を唱えます。毎日30から40軒ほど回ります。私たちにとってもかなり厳しいスケジュールです。でもお昼が楽しみの一つです。全久院の檀家では、松尾恵司様、高木常寿様、りゅうせん様、轟健治様で昼の点心所を引き受けてくださり、また多くの檀家様で心のこもったお茶を出していただき、疲れを癒すことができます。こんな檀家様の支えで百周年が盛大に開催されたと感謝しています。

観音講

本年も、1月17日に新年会を浅間

温泉にて行い、一年が始まりました。2月から5月まで毎月一度と全久院にて通常の観音講を開催しました。観音様の前でお経を唱え、家族の「幸福を祈り、ご詠歌をお唱えし、寺の自家製の精進料理でお昼を召し上がっていただきました。今年から、大黒のピアノに合わせて、唱歌を歌い始めました。今歌っているのは、「野ばら」と「花」です。講員の皆さんは歌が大好きで、2部合唱にもチャレンジしています。大きな声と一緒に歌うのはなかなか気持ちの良いものです。また息を長く続けるので長生き(長息?)になります!



温泉へとバスに乗り込む観音講の皆さん

また住職による、「お経一口講座」も始めました。観音様の前でお唱えするお経は、般若心経、修証儀、法華経などですが、今年は法華経の意味を難しくならないように説明しています。観音経には「念彼観音力」という言葉が多く出てきます。その前の言葉は「推落大火坑」、後の言葉は「火坑變成池」です。大きな火の坑に落ちたら、彼の観音の力を念じなさい、そうすれば火の坑が池に変わりますという意味です。これは奇跡を起こして人を助けるという意味にとられがちですが、本当は私の心の中にある人を嫉み、羨ましく思う火のような心を、観音様を念じることによって、人々を潤す池、命を育む池のような心に変えることが出来ます。いやそんな心をもてる人間にならなくてはならない、という教えです。というようなお話しをしています。ちょっと堅苦しいですか？

それでも講員の皆さんは「歌ったり、気心の知れた方とおしゃべりをしたり、料理を食べたりで、楽しくて、清々しますよ」とお話いただいたり、「観音講が楽しみです」と言っていたので、私たちの張り合いになります。6月は市郊外の桃仙園で一日ゆっくりします。参加ご希望の方は、是非奮ってご参加ください。ご希望の方は電話でお申し込みください。

坐禅会にご参加を 今年の座禅会は

2月19日、3月19日、4月23日、5月21日と開催してきました。毎回少しずつ坐る時間を長くして来て、25分坐ってから5分歩く坐禅、その後25分坐っています。東堂の妹弟子にあたる愛知尼僧堂の青山俊薫師より、「坐禅は精進料理や懇親会と一緒にしないほうが良い。坐る時は坐るだけ」とのアドバイスを頂き、今年から、精進料理を出す会と懇親会を行う会を分けることにしました。



また、坐禅の話は青山俊薫師が松本市民タイムスに連載している「従容録」を読み、住職が解説します。本年5月21日のお話しを紹介します。

従容録第六則、馬祖白黒。中国唐の時代、馬祖という高名な禅師様に弟子が「達磨大師がお伝えになった仏法のぎりぎりのところを、言葉や理屈を離れ、端的にお示してください」と聞かれ、「蔵頭白、海頭黒」と答えた。馬祖禅師の答えが白黒ということで、「馬祖白黒」となったのですが、その意味は智蔵和尚の頭は白髪で、懐海和尚の頭は髪が黒です、との答えです。

禅というと難しい理屈を勉強し、理解すると考えがちですが、年をとると髪は白くなり、若いと髪は黒ですという当たり前の現実を、色眼鏡をかけず、在りのままに受け入れることのすばらしさに気づく、当たり前のことをそのまま受け入れ、勤め上げることのすばらしさに気づくことが禅です。ということを皆さんの考えを話してもらいながら勉強しています。住職の頭が硬いので、内容が少し硬くなり過ぎでしょうか？

7月からの予定は7月9日(土)坐禅のみ・8月27日(土)坐禅と精進料理、懇親会・9月17日(土)、10月8日(土)、11月19日(土)坐禅のみ・12月17日(土)坐禅と精進料理、懇親会。16時より 全久院にて開催します。ご希望の方は電話にてお申し

込みください。

ご詠歌の練習会始めました 観音講で毎回ご詠歌をお唱えしていましたが、本格的

に練習してみたいとの要望があり、白板の東昌寺の副住職、飯島恵道師に指導をお願いし、住職と住職の母、大黒を含めて7人で稽古を始めました。毎月第3木曜日の朝10時より11時半まで行っています。まだ、習い始めたばかりなので、基本的なこと習っています。道具の扱い方、始めの挨拶の仕方、唱え始めの節、一番基本となるご詠歌「三法御和讃」「正法御和讃」を練習しています。

最初は道具に気をとられてお唱えの節を間違えたり、また緊張しすぎて声が出なかったり、道具の音が出なかったりといういろいろありましたが、何とか2つのご詠歌はお唱え出来るようになってきました。将来はご詠歌の、県大会や全国大会にも出てみたい、検定を受けよう、など夢を語りながら稽古に励んでいます。指導の飯島師も皆の失敗にも関わらず、寛大な気持ちで見守ってくれています。厳しいというより楽しく失敗をしながら、上達するよう指導してくれています。稽古の仲間も10人くらいいればと思います。旅行などのお楽しみも考えながら、ご詠歌を習ってゆきたいと思いまので、ぜひご参加ください。

檀家の皆さんと懇親会 本年も、

お盆が始まるにあたり、お墓の掃除や、窓拭きをしていただき、その後懇親会を催したいと思います。昨年も15の方が参加していただくことができました。左の写真は、汗をかいた後の懇親会の模様です。住職も堅苦しい着物を作業着に替え、一緒に作業をし、一緒に汗をかき、一緒においしい一杯を頂きたいと思います。



7月24日(土)15時より掃除 17時より夕食を兼ねた懇親会 全久院

の庭に集合 作業のできる服装でお越しください。厳粛な中でのふれあいでなく、汗をかきながらの作業や懇親ですので、堅苦しくないお寺の様子もわかっただけかと思えます。参加希望の方は食事の都合がありますので、電話にてお申し込みください。

「りらの会」発会。自宅や寺での法事のためのお手伝いを派遣します 去

年、準備を開始した、「りらの会」が6月5日(日)正式に発会しました。この会は買い物、家の内外の掃除、食事作り、家事、庭木の手入れ、病院への付き添い、など身の回りでちょっと手を貸して欲しいと思うことのお手伝いをする人を派遣する会です。

私は長い間お寺にもこのような組織が必要だと考えていました。法事の席で皆様から様々な話を聞かせていただく中で、精神的なアドバイスばかりでなく、「実際に手を差し伸べ

と一緒に体を動かすことができれば、問題解決になるのにな」と思うことが何度もありました。しかし一人では限界があります。「相手の立場になって、温かい心でちょっと手を貸して、一緒に不便さを解消してゆくことが出来ないか。」という思いを、一緒に海外のボランティア活動をしていた鳥居さんに話しました。すると、「私も5年前からそんな会を作りたくて準備していました」もう始めるしかない！これが「りらの会」発会に繋がりました。この会は、**自宅やお寺での法要**に人材を派遣します。① 掃除 ② 配膳 ③ 賄い(お茶やお酒や料理を出す) ④ 後片付け ⑤ 清掃 などを行います。費用は一人時給1000円程度。ご希望の方は全久院に電話ください。ご相談に乗ります。また、ご自宅でのお手伝いをご希望の場合は「りらの会」事務所(鳥居とし子) [0263-46-2175] まで電話をお願いします。個別に相談を受け仕事の内容、料金など確認して、会のメンバーを派遣します。



設立総会で挨拶をする鳥居代表

今身の回りを見回すと、便利になりすぎて、自分の居場所がなくなったと思うことが多くなりました。話し仲間がいない、ちょっとした買い物の「お店屋さん」がない、人との触れ合いがない、多くのものを無くしてきてしまったと思います。そんな心の隙間を埋めたい！っとするのがこの会です。この趣旨に賛同しお手伝いいただける方も求めています。

お盆参りのお知らせ お盆のお参りを季節が巡ってきます。東堂さんの体力が落ちて来ており、今年から長男、俊浩が棚経に回ります。長男は今年駒沢大学に入学し僧侶の卵ではありますが、細かい作法はまだまだ。お参りに伺う皆様どうか寛容のお気持ちで、育てるお気持ちでお見守りください。今年の予定は下記の表のとおりです。従来の周り順と変更はありません。よろしく願いいたします。

8月	住職の回る範囲	東堂(か長男)
9日	新盆のお宅	
10日	安曇、明科、麻績など超遠方	
11日	並柳、寿、塩尻、新村、二子、南松本など市外南部	笹部、征矢野
12日	筑摩、惣社、横田、岡田、沢村など市外北部	月見町、南原
13日	源地、県、清水、女鳥羽、浅間など市内北東部	宮村、埋橋、井川城
14日	北深志、蟻ヶ崎、丸の内、島内、白板など市内北西部	庄内、本庄
15日	留守だったお宅、鎌田、博労町、飯田町、本町	豊田町、南新町、井川城
16日	留守だったお宅	

住職は1日110件以上、東堂(長男)は20件をめぐりに回ります。住職は朝7時から、夜10時

くらいまで回ります。まだ、来ない、変だと思いの方は15日までにお電話ください。何かの拍子に飛び越して回ってしまったり、すれ違ったりしているかもしれません。15、16日の午前中にお留守だったところも含めて回ります。よろしくお願いします。

ミニ知識 前号では道元禅師がお生まれになってから、中国で修行されるまでを紹介しました。今回はそれ以後の道元禅師をご紹介します。

帰国 天童山景德寺での修行を終え、帰国にあたり如浄禅師より「深山幽谷に住し、一箇半箇を接得せよ」のお言葉をいただき、1227年安貞元年7月ごろ中国を出発、明全の舍利を懐いて日本への帰途に着いた。8月現在の九州大宰府に着き、建仁寺に入った。

建仁寺 講師的立場で3年間勤めたが、京都五山といわれ、叡山の末寺だった建仁寺だったが、厳しい叢林生活は色あせ、栄西や明全のころの面影はなく、厳しく仏道を求めようとした禅師は帰って叡山の圧力でこの寺を追われることになった。禅師にとって建仁寺は「普勧坐儀」の撰述始めたこと、禅師の名声を聞いて訪れた懐英(後に永平寺二世となった)と面会したこと、永平寺開山の檀那となった波多野義重と交渉始まったことにその意味を見出すことができた。

安養院 1230年寛喜2年、洛南深草の里、極楽寺の子院安養院(現在日蓮宗欣浄寺と言われているが定かではない)に移った。極楽寺は弘法大使より四代の法孫、聖宝阿闍梨の開山で、叡山の末寺、藤原基経の発願でその子時平によって開かれたため、藤原氏の外護を受けていた。ここでは「弁道話」説示した。

観音導利興聖宝林寺開創 道元禅師の帰朝後の活躍は興聖寺開創から始まったといえます。1233年天福元年極楽寺を観音導利興聖宝林禅寺と改称、興聖は聖道の興隆と国家の安寧を、宝林は中国禅宗の曹溪の宝林寺に達するの意味で名づけられた。法堂は正覚尼により寄進されたといわれている。正覚尼は道元の父通親の妹で、源実朝の妻だった。実朝は頼朝の子で頼家の弟。頼家は二



現在の興聖寺の山門

代将軍になったが、23才で刺殺された。殺される1年前に建仁寺建立したり、三男を栄西

の弟子(殺される)にしたり、仏教に帰依した。

実朝は三代将軍(12才)となったが、頼家の次男公暁により父の仇として殺された。公暁も実朝の首を掲げた帰りにまた殺された。道元禅師の父、通親と頼朝は不仲だったが、実朝とは仲良く、よって妹を嫁がせたが、実朝の死後京都に帰り、東寺の近くに大通寺を建立し出家した。このように道元禅師のごく近くでも朝廷や宗教界の暗躍があった。

{興聖寺での活躍は次号へ}



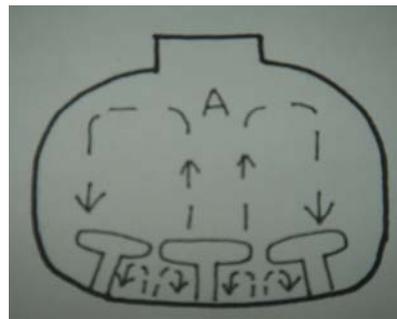
現在の興聖寺

茶道(お茶を美味しくする方法) 全久院は表

千家の長野県支部事務局になっています。毎年県内の先生を対象に、京都から家元講師をお招きして、講習会を開催しています。その講習で、「美味しいお茶を点てるための美味しいお湯」という大変面白いお話がありましたので紹介します。

茶道ではお湯を沸かす道具は釜です。釜をお持ちの方は底を覗いて見てください。右の図は釜を輪切りにしたものです。釜の底には鋳がついています。点線のとおり、釜の底と鋳のところで湯が煮立って対流が起きます。底は炭の火で暖められるのでかなりの熱さになりますが、100℃以上で煮立ってしまうお湯は、この対流のおかげでほんのわずか鋳の隙間から上に漏れてゆきだけです。ですから沸騰してしまうお湯は底と鋳の間に閉じ込められます。釜全体のお湯はAのように対流します。沸騰はしません。沸騰すると水の中の酸素が外に出てしまい、お湯の美味しさが損なわれます。この沸騰しないお湯を使うことでお茶が美味しくなるわけです。

こんのような知恵を使って茶道の釜は作られています。この話を聞いて日本の技のすごさを知り、何かうれしくなりました。



絵本が届いた！ おんなじ空ネットワーク(通称

空ネット)が中心になり、松本深志高校、松本工業高校など多くの方々の協力を得て、今年も1221冊の絵本をチェックしカンボジアへ贈りました。この本はSVA(シャンティー国際ボランティア会)が日本中の協賛者にお願ひし、日本語の絵本にカンボジア語の翻訳文が書かれているシールを貼り付けてもらい、現地



の子供たちが読める本に仕上げてもらっています。その翻訳文シールが正確に貼られているかをチェックするのが私たちの仕事です。昨年10月から作業を開始して、本年2月14日に東京大井埠頭に送り、2月末にカンボジアに到着しました。

カンボジアでは多くの先生が殺され、しっかりした教育技術を持つ先生が非常に少ないのが現状であり、子供が学習に興味を持てる学校作りにこの絵本は多大な貢献をしています。

今年も10月からチェック作業を始めます。ぜひご協力ください。お願いします。

カンボジアで見つけた私の生き方 高校生絵本寄贈の視察 空ネットによる絵本

の寄贈とそれらの絵本がどのように活用されているか、3月9～14日までの6日間現地視察に行ってきました。今回は空ネットのメンバーと、絵本作りに協力してくれている松本深志高校図書館委員の丸林彩乃さん、小林綾さんが参加しました。詳細はテレビ松本の特集番組となり5月30日に放映されました。

今回の視察は都会を離れて、タイ国境に近い農村部の学校を訪ねました。地雷処理をする現場に遭遇したり、ポルポト政権下の強制労働で作られたダムや水路を見学したり、田舎の校長先生宅で食事を頂戴したり、多くの先生や生徒に出会い直接話もしました。このような多くのことを経験をした彼女らに次のような感想を聞かせてもらいました。

「日本と比較すると逆境に生きている多くの子供に会いました。社会の貧困を目の前で見ました。でもそこで会った子供も、先生も、農家の人も、機を織る女性も生き生きとしていました。現地の人を見てると戦争で破壊し尽くされたカンボジアを復興させたいという強い力を感じました。大変に恵まれた



空手を教える丸林さん

日本では見えなかったものが見えてきました。それは平和な社会を実現することです。そしてそれに結びつく夢を持ちたいと思いました。」「カンボジアで光と影を見ました。本で読んだ戦争の悲惨さ。戦争から立ち直ろうとする活気ある現実。戦争で何度も死にそうになりながら生き延び、一人一人の命を大切にする戦争のない社会を作り出してゆく子供たちを育てるために教育に携わるカンボジアの人々。苦しい体験を話す時の苦難に満ちた表情と、平和な社会を創造しようと語る輝いた表情との、光



子供たちに手品を披露する住職

と影。今回いろいろなことを経験して、何事も自ら体験しなければ現実には分からない、ということに初めて気付きました。今まで私は自分が生きてゆく道を見つけようとしてきました。でも自分に対して自信がなく、どう生きたらいいか迷っていました。しかし、カンボジアの人は、4~5人も乗ってしまうバイクのタクシー、ひっくり返りそうになるまでバイクに荷を積んで走り去る人、一日かけて数匹しか取れなくても平然としている漁師、電気が引かれてなくてもカーバッテリーでテレビを見人々…。人間つて意外に逞しい。私だって数日ではあるが彼らと同じものを食べ、同じ時を過ごしたが、けっこう生きていけるじゃないか。日本では小、中、高、大学ときっちりレールが敷かれている。しかしカンボジアには生きる道はたくさんある。これから私も勇気を持って自分の生き方を見つけることが出来そうな予感がする。」



民家のそばにも地雷が埋設されていた

なんとすばらしい感想でしょうか。こんなすばらしい高校生と一緒に時間をすごすことができたことを、心から感謝しています。自分にもますます力が湧いてきました。